

エキストラ

香川師範学校本科昭和 26 年卒 川添 正次郎

映画「写楽」の一場面にエキストラとして出演したことがある。

「これじゃ駄目だあー、もっと布の際立ちをきちっとやれよ、いい加減にするなよ、これは大事な場面なんだから」篠田監督の指示がとぶ。係の人が素早く針仕事にかかる。監督のオーケーが出て、再度のリハーサル。フランキー堺さんが幕の破れ目に指を入れて破れ目を広げ、そこから客の入り具合を覗く。「この場面は客の入りが悪くて、小屋が倒産しかかっているのを堺さんが立てなおしてやると言って様子を見に来ている場面です。この人が社長さん、小屋主ですね、劇場係の皆さんは心配そうな顔で後についている、あなた専務さん、あなた常務さんといった気持ちでやって下さい。」「社長さんが向きをかえてあちらへ歩いて行きますから後について行ってください。はい、それでは行きます」と助監督の指示があって、化粧係、衣装係の人々が各人のチェックをして行く、私ははおりの紐を結び直してもらった。

「本番行きます、フランキーさん、よし俺が立てなおしてやるぞ！といった意気込みの目で見てください、いいですか、自動車止めて、本番、ハイッ」カチンコが鳴ってフランキーさんが幕の破れ目から客席を覗く、私たちはその後で心配そうに立っている、やがて小屋主さん役の人がおもむろに向きを変えて舞台の隅の方へゆっくりと歩いて行く、私たち三人はその後について歩く。

「ハイ、よーし」「フランキーさんありがとうございました。江戸時代の感じがよく出ているよなあー」と監督が周りのスタッフに声をかける。「ここでの仕事は全部終わりました。皆さん、ご苦労さまでした」そこで一斉に拍手が起こる、監督、助監督、スタッフの人々、俳優さんたちもみんなで拍手「やあご苦労さまでした。ありがとうございました」とフランキーさんが私たちエキストラの者に優しく声をかけてくれる。

「はおりを着ている人、芸者さん役、武家の奥方の方は二階席か上座に上って下さい、適当に客席の方で見物人になって下さい。ご苦労さまでした」と助監督の指示、私は二階へ行って舞台での市川団蔵丈の演技を見ていた。仙台萩か何かをやっているらしい。「アツ取り逃がしたり、アツ、カーツカカ」とか何とか大げさな見栄を切っている。助監督が何か指示を出して、リハーサルが繰り返される。団蔵丈の芸に対してではなく、光の当て方や集音マイクの方角などの調整をやっている。いよいよカメラ位置が決まるとメジャーで計測してピントを合わせている。よく見ると客席で使っている小道具なども江戸時代の本物を使っている。映画作りの厳しさがみえる。ふと横を見ると客席に居る人々の姿が面白い光の中にシルエット状に浮かんで、髷姿、着物姿が実にピッタリとして美しいのに気付く、日本人には髷姿がよく似合う。私は江戸時代に紛れ込んだような錯覚にとらわれた。